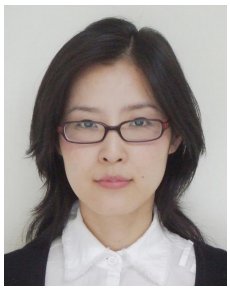
所属：呉工業高等専門学校　建築学分野

研究タイトル：

近代都市公園・オープンスペース計画に関する研究



氏名：	安　箱敏 ／ Sangmin AHN	E-mail：	ahn@kure-nct.ac.jp
職名：	准教授	学位：	博士（学術）
所属学会・協会：	日本建築学会、日本造園学会		

キーワード：	都市基盤施設、植民地期、近隣住区、ソウル（京城）、変容
提供可能技術：	kenntiku CAD(AutoCad)、 建築設計・デザイン（コンピュータによる図面作成／表現、3D プレゼン技術を含む）

研究内容：韓国ソウルにおける近代都市計画公園形成に関する研究（2015 年 4 月現在）

韓国ソウルにおいて、法定都市計画による公園が、どのような意図のもとに、どのような過程を経て成立し、変容を遂げたかを、植民地期から韓国戦後までの時期を通して解明を続けている。植民地期ソウルにおける法定都市計画は、1936 年の「京城市街地計画」制定によって開始されるが、前段階として策定される「京城都市計画調査書」（1927 年）と「京城都市計画書」（1930 年）とのつながりを分析した上で、「京城市街地計画」を踏まえて 1940 年に指定される「京城公園地区計画」や「風致地区」の詳細、そして、戦後の変遷過程の解明が主な先行課題である。

1　1930 年京城都市計画公園指定における運動公園

1930 年の「京城都市計画書」において、衛生あるいは娯楽といった都市計画公園の基本用途以外に「運動公園」の 7 カ所が設定されていたことに注目、このうち実際に設置されていた3カ所について、その使われ方を調査した。その調査においては、新聞資料など当時の日本語と韓国語文献の解釈を中心に行った。その結果、スポーツ大会など名目に合致したものもあるものの、野外音楽会や式典など群衆を集める「広場」としての意味が卓越していたことを明らかにした。

2　日帝期ソウルの児童公園（小公園）計画

1940 年に「京城市街地計画」に基づいて決定した「公園地区」について、その中でも児童公園（小公園）の設置状況と機能を中心に考察する。特に、「京城市街地計画」において児童公園が重視されていたこと、そして、「土地区画整理事業」の一環とした小公園が多数計画され児童公園用地の造成に与えられていたことに注目し、日本国内とほぼ同基準で設計されていたことが新たに解明できた。また、「公園地区」の策定過程においては、1938 年まで風致地区と一体で進められていたものが途中で分離し、「風致地区」は景観の保護、「公園地区」は散策・運動機能を分担することとなったことを明らかにしている。

3　戦時下における公園及び韓国解放後の変遷

戦争の深刻化により 1937 年に制定された防空法は、道路計画や都市計画全般を始め公園計画にも影響を与えるようになる。日本国内では防空緑地が指定され、同じくソウル（京城）の公園内容にも防空施設の整備が計画される。「保健広場」と名付けられていた、公園計画とは別個に指定されるオープンスペース計画を通して、戦時下の防空緑地計画を検討した。日本植民地から解放したソウルでは、公園の変容が続き、一時期は住宅の開発に公園用地が与えられるケースも多かった。このような変遷過程を、文献解釈や現地調査を通して解明している。

今後の課題

韓国の近代都市計画史を論ずるには、日本統治下で行われていた計画理念を理解する必要がある。これは、現況を理解するにも欠かせない作業であり、そのためには、当代の日本国内における都市計画内容を考察し、その発展や変遷過程を比較、関連性を検討・解釈する作業が今後の課題として残っている。

提供可能な設備・機器：

名称・型番（メーカー）	